

北越書譜

二編 春

農商務省  
圖書  
號冊

十二五五

大政官文庫  
和書門  
一六〇  
一七五  
冊架函號

內閣文庫  
和書  
一六〇  
一七五  
冊架

內閣文庫	
番號	和 11160
冊數	7 (4)
函號	175 80



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



北越雪譜 二編 四卷

越後 鈴木牧之 編撰 天保辛丑新刻

京山人百樹 增修 書肆 文溪堂

江戸 京水百鶴 畫圖 發販

北越雪譜二編叙

明治九年購求

北越雪譜六卷 越後塩澤 鈴木牧之 老人

雪窗 炤寒 隱几 隨筆 其事 出實脚

徒非 構空 架虛 之談 然翁固 不必期於 梓行矣

嚮者 郵筒 懇乞 披正 居之 步刈 英蔓 披擲 著目

英光 輯之 卷以 為初 編告 翁使 書肆 文溪 堂刊 布

之於 後越 考之 奇平 彙萬 狀供 卧遊 資錦 室

婦妾 市宅 妻婢 以詳 知越 靈解 士通 人或 云

格致之助爰以雪譜之名頗踴躍於是乎書  
持類乞嗣撰蓋以知在之殊稿在也余謂不踏越地  
不可說越事仍丁酉之夏携乃兒京水越遊救  
十日有紀行作再採數條刪補少弱之殊稿以爲二  
編稿定將置序言奪頃有晚喜連日放晴紅酣  
綠戰花神旺壯遊心勃興欲詣賽成田山感怒王祠  
以療錐毛之痲矣夫成田山香火之盛世々可知也凡  
自江戸到成田者抵小細街橋岸一買搭船水路直

往行德都人皆以爲捷徑蓋行德一本會也不必成  
田香火者搭船常蓋列平橋岸待行客是以俗呼  
茲岸云行德河岸呼茲船云行德船余亦臨此  
搭船其所供載者多足庸界雜沓穢衆口喋  
嘈余傍在一僧一士一商僧年齒六十許從一童偈  
士可二十四五誇崙轆後殆似學究商半老樓撞  
市樣相俛接膝余籍默不敢出一語瓦屋漸老蘆岸  
芽茸櫻木浮雪嫩柳吐烟村落春景百逞如畫

頗水行之會心也。船既過，舟人庸身多就賦，  
嘈之自羅寒之可悅，壯士出墨斗，持懷楫，竟句果，  
是書生也。老僧以鑿楚鏡，披書士，閣筆曰：尊者所  
執，是何書？僧曰：北越雪譜。士曰：僕嘗讀之，先因冊子  
何足比。僧曰：貧乞一錫，留干北親，知越雪，故特購之。  
供以續笑。今閱京山人序，彼少識字乎？士曰：否。不  
夫京山者，文場之奴隸，藝苑之僮儷也。近年隨落  
子，裨史院本之泥中，汚塗姓名，遂不能脫其窠窟。

強於彼自為。李漁金人瑞之流，亞文家爭海  
之。亦僧哈然笑而不應。余佯睡，以之高已，得曰：鄙人  
書要也。能識刊行之趣，凡上梓之書，不論編輯之荒  
誕，與詞章之奇雋，只以多寡為大著述。奉其作  
者，為搖鈴樹翁，強感心服。顏士新書，若其不啻唾  
而不顧，是書時之通義。曹耦之常態也。北越雪譜  
初編之梓，一舉數七百餘部，刷板裝本，至不暇給。  
故二編刻，後免當有。近矣士不然，其言猶在不止。

雪譜二編

鼓南頻鼓僧手釋卷曰論說姑置足下談京山  
 年否士曰不識僧曰我十年前與彼會於一精  
 舍僅得一面談不為無母緣言畢遽然拍余背  
 曰京山老人醒眠長先忘我飲余悵然不得應時  
 船者行懷之岸舟中之人皆上岸不復如叨吐歎  
 于茲矣此夕然其言於逆旅燈下以爲序云

天保十一年庚子潔月

京山人百樹并書



北越雪譜二編凡例

此書全部六卷收之老人之眠を驅の漫筆梓を俟ざるの稿本あり故小走  
 墨亂字一圖も亦抄画あり老人余小示して校訂を乞ふ因て其駁  
 雜を刪り校訂清書一圖ハ豚見京水小画一の三卷書賈の  
 請小應り老人小告て梓を許し以世小布小發販一舉して七百餘部を  
 鬻り是小依て書肆後編を乞ふ然ども余が机上宅の編筆小忙々屢稿を脱す  
 の期約を失ひゆゑ近且務て老人が稿本の殘冊を訂し以其を小授く  
 收之老人ハ越後の聞人あり嘗貞次村實を以聞之屢縣監の褒賞を拜して氏  
 の國稱を許す生計の餘暇風雅を以四方小交る余が亡兄醒菜別号翁も鳴書の  
 友ありゆゑ余も亦是小嗣ぐ老人余小越遊を奨くを年あり余固山水小耽の  
 癖ありゆゑ小遊心勅たなまも事小幼て果さむ丁酉の晩夏遂小豚見京水を從く  
 啓行を始り越後の諸勝を足さんと思ひ越地小入後年稍侵して穀價貴踊

人心種ありきゆゑ小越地を踐つて僅わずか小十じゅうありきと云々も旅中りちゆう小於せうて耳  
 目を新あらた小せし事ことを奉たてまつて此書このしよ小増修まへしゆも百樹ひゃくじゆ曰いつりりの是この  
 前編ぜんぺん小載のせする三國嶺さんこくりやうの圖づ六牧むく之老人のらうじんが草画そうが小倣なまて京山きやうざん私儲ひそたく満山まんざん小松樹まつじゆを  
 画えり余越遊よあつりゆうの時三國嶺さんこくりやうを踰こへ小此嶺このりやうハさうあり前後ぜんごの連岳れんがくをく松を  
 見みむ此地このち小くもも越後えちごハ松まつの少すくき國くにあり三國嶺さんこくりやうを知しる人ひとハ松まつを画えるを  
 ばは是老人このらうじんが本編ほんぺんの誤あやまり小非ひも京水きやうみづが蛇足へびあしあり  
 山川さんせん村庄そんやうハさうあり凡物ぼんぶつの名なの訓しんと清濁せいじやく小より越後えちごの里言りげん小たがひひするも  
 あらあら然しかども里言りげんハ多く俗訛ぞくしあり今姑俗いまこ小从しゆりあり本編ほんぺん小音訓おんしんの假名かを  
 下くださむかあづけハ余よが必かならず為なり誤あやまりを本編ほんぺん小驅くこと勿なき  
 余也固よ浅学せんがく小て多く書しよを不讀よみ寒家かんか小て書しよ小不富ふ少すくく藏かくせも屢しばしば祝融しゆじゆう小  
 奪うばて架上蕭然せうぜんなり依よ之の増修まへしゆの説せつ小於せうて此事このことハ彼書か小見みと賞も其書そのしよ  
 を藏かくせむと急就の用もち小弁べんせむ職痒かゆも多く且かつ浅学せんがくあり引漏ひきり

らるも最たまらるるべし

本編ほんぺん雪ゆきの外の外它のの事ことを載のする雪譜ゆきふの名なを空あくす小似にとごも姑記こして好事こうじの  
 話わ柄へ小具ぐを增修まへしゆの説せつも亦然しかなり  
 雪ゆきの奇状きじやう奇事きじ其大槩そのおほまハ初編しよ小出でせり猶なほ軼事えつじ有あるを以此この二編に小記きを已お小初編しよ  
 載のするも事ことの異ちがひハ不舎ふしやして之のを録ろくを盖おほ刊かん本ほんハ流傳りゆうでんの廣ひろきりのゆゑ初編しよを  
 讀よむ者ものの為ため小するの意いあり前後ぜんごを讀よみ其層そのへい見重出けんじゆうでを話わこと勿なき  
 釋しやくの字じ叙じゆ小作さくの外の外澤たくを沢たく驛えきを馭し小作さくハ俗ぞくありさうもごも卷中まきちゆう驛澤えきたくの字じ送  
 姑俗こぞく小从しゆり馭し沢たく驛えきを省しやうく餘よの省字しやうじハ皆みな古法こぽう小从しゆり  
 卷中の画まきちゆうのゑ老人らうじんが稿本かうほんの竹画たけがを真ま正ただ或あるハ京水きやうみづが越地えちご小字あざハ真景ま或ある里人りじんの話わを  
 聞きく圖づ小作さくりらるもあり其地そのち小照しやうして誤あやまりを責せむことありき  
 老人編らうじんぺんを嗣ついでの意いありゆゑ小初編しよ二編にとの前編ぜん後編ごとのごも  
 天保十一年庚子仲春 京山人百樹識

一之卷目録

越後の城下

古昔ある旧蹟

雪の元日

雪の正月

玉栗。羽子權

雪吹小焼飯を賣

雪中の戯場

家内の氷柱

雪中の用具

輜の説

寒氣の力

シガ

夏の雪

削氷

雪の多少

浦佐の堂叅

通計十六條

北越雪譜二編 卷一

卷之一

越後塩澤

鈴木牧之編撰

江戸

京山人百樹増修

○越後の城下

越後の國往古出羽越中距離一專國史小見ゆ今ハ七郡を以テ

一國とモ東小岩船郡古小作蒲原郡新寫の傍此郡小屬す西小魚沼郡海小

北小三嶋郡海小刈羽郡海小南小頸城郡海小近き古志郡海小以上七郡也

城下ハ岩船郡内藤侯村上五九千石蒲原郡柴田黒川柳沢侯一石三日市

柳沢彈正侯一萬石陣營三嶋郡井伊侯刈羽郡推谷古志郡長岡牧野

七方四千石頸城郡小高田系魚川松平日向侯以上城下の外頗豊饒を為

是処魚沼郡小千谷古志郡小三條三嶋郡小寺泊出雲崎刈羽郡小

柏崎頸城郡小今町り蒲原郡の新寫ハ北海第一の渚福地た

夏論を俟ど此餘の豊境ハ姑畧を此地皆十月より雪降るその深と  
浅とハ地勢小よる猶末小論せり

古哥ある旧蹟

蒲原郡の伊珍彦山一 伊珍彦社を當國第一の古跡とを祭るところの

御神ハ饒速日命の御子天香語山命あり 元明天皇の和銅二年の垂

跡とを社領 五音石此山さの高山ゆもあつぎととも越後の海濱八十里の中やど小

独立しん山脈りつこの山つうも右小國上山左小角田山を提攜しん一

国の諸山是小對しん拱揖せりか如くつこの山よりも見えて實小越後の

鎮ともあつぎ山は是よりやうあつととちりつぎとを命もつ小垂

跡ましくとこ此御神の縁起或ハ美驗神宝の類記をぎ夏あるとこあ

とも姑と小省のさへ此山をよとる古哥小万兼しや日子のまの神さび

青雲のたむびく日まゝ小雨をやうあつぎ又家持小しや彦の神のふと

小けりもつこのまをんかをのまぬきつぬつたつ角長濱 頸城郡小

在り三島郡とある家持の哥小めきう雁のつまきを休むてふとこや名小

かふ浦の長濱 名立 同郡西濱小あり今ハ宿の名小よぶ 順徳院の

御製小兼久のまゝ佐渡遷幸の時あり都をささとて出今宵もつ身名立の

月を見る哉 直江津 今の高田の海濱をい同御製小「あけバ

聞きけバ都のこのさ小此里をさ山やとぎ越の湖 蒲原郡小濱

とよぶ処多し里言小湖を濱とつとの大あつを福嶋濱とつ四方三里計

此濱小遠くつびして五月兩山あり貫之の哥小潮のつ越の湖近けは始

もまあつぎ末小り 又俊成卿小恨もつあつせんあをの越の湖

もつあつあつぎ又為兼卿 年をへつり越の湖ハ五月兩山の森の岸

柿崎頸城郡小親鸞聖人の詠玉あつぎとく口碑小傳あつぎ哥小柿崎小

あつぎ宿をとり小主の心あつりあけり 按あつぎ小聖人御名を



善信と申す三十五歳の時諺口小係りて越後小謫さる時小承元元年二月あり後五年を経て勅免ありて法を弘ん為とて越後小いししこと五年あり故小聖人の旧跡越地小残より弘法廿五年御歳六十の時洛小飯玉あり越後小五年下野小三年常陸小十年相模小七年弘長二年十月廿八日遷化壽九十歳件の柿崎の哥も弘法行脚の時の作ありて

此外▲有明の浦▲岩手の浦▲勢波の渡▲井栗の森▲越の松原も古哥ありて他國もありて名所ありてた小越後とてさなり

さて今を去夏天保十一五百四十年前永仁六年戌のち藤原為兼卿佐渡左遷の時三嶋郡寺泊の駅小順風を待玉ひ間初君との遊女をゆ玉ひ小初君が哥小のちひて路の浦の白浪も立るあり

とてさけ此哥吉瑞とありてや五年たちてのち嘉元元年為兼卿飯洛ありて九年の後正和元年玉葉集を撰の時初君が件の哥を入

とらと玉あり是を越後第一の逸事とて初君が古跡今寺泊小在り里俗初君屋敷との貞享元年釈門萬元記との初君が哥の碑ありてか断破しを享和年間里人連修して今存せり

○雪の元日

凡日本国中小於て第一雪の深き国ハ越後ありと古昔も今も人の事ありとて越後小於ても最雪のちこと一丈二丈小ありて我住魚沼郡あり次小古志郡次小頸城郡あり其餘の四郡ハ雪のつる変三郡小比ま浅し是を以論む我住魚沼郡ハ日本第一小雪の深降所あり我その魚沼郡の塩沢小生と毎年十月の頃より翌年の三四月のころまで雪を視事ハ小六十余年近日此雪譜を作るも雪小麓居のまありさ我塩沢ハ江戸を去て僅小五十五里あり直道を量るや近るて雪の時ハ健足の人ハ四日ありハ江戸小

けつるべし其江戸の元日を聞かば緋神朱門の夏はあつても市中八千門  
 万戸千歳の松をかざり直る御代の竹をたて太平の七五三を引と  
 るふ新年の賀客麻上下の肩をつつ福を往來する小万歳もうち  
 まどやの女太夫とう鳥追ひの三味線ふめどてた哥をうらひ娘の児の  
 やり羽子男の児の糸鷲見よりの聞のめなごうふ初日影花や  
 小き一昇する實小新玉の春こそゆづりけと其元日も此雪国の元日も  
 同元日あることも大都會の鶯花と邊鄙の雪中と光景の替りし事  
 雲泥のちがひあり○そも我里の元日只野も山も田圃も里も平一  
 面の雪小埋り春を知つて庭前の梅柳の類も去年雪の降る秋の末  
 小雪を厭ふ丸太を立く繩縛小過するま雪の中小ありう元日の春  
 をあつてもさる人も三四月小いささば梅花を不見翁が向ふ春も  
 稍景色とこの月と梅と吟ぜり大都會の正月十五日ありまこ

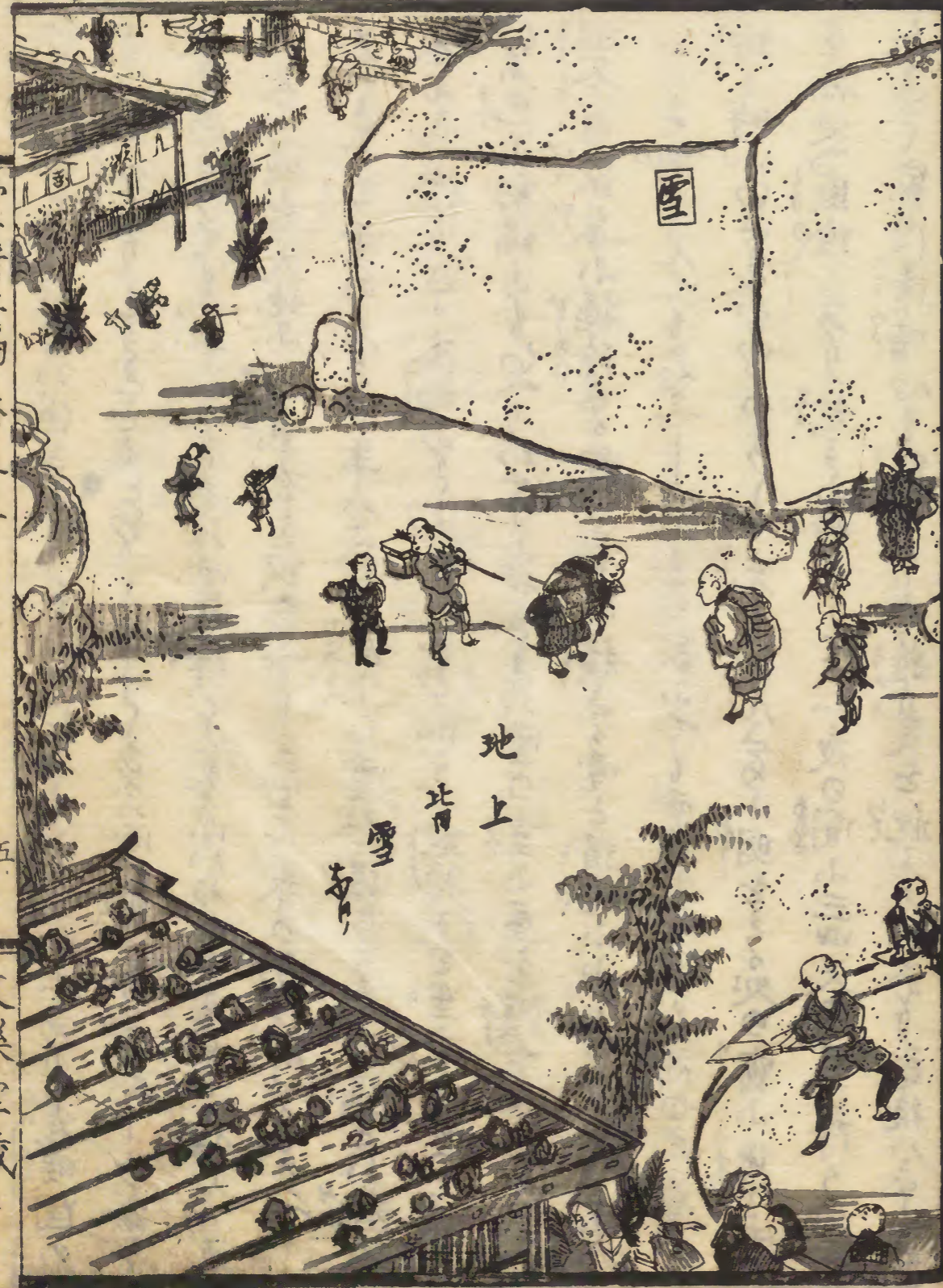
山里の万歳遅し梅の花と邊鄙の三月あるべし門松の雪の中一建  
 七五三さるる雪の軒小引こつて禮者ハ木履をきき従者ハ藁靴あり  
 雪徑小階級ある所小いささば主人もさうさつ小をたうさ此げこつて  
 礼者小うささる人皆さるり雪全く消る夏のそとめ小いささば草  
 履をさる事ありささる元日の初日影も惟雪の銀世界を照その  
 つつて春の景色を不見古哥小「花をのこ持らん人小山里の雪間の  
 草の春を見せむや」とい雪浅き都の事さう雪国の人ハ春小いさ  
 春をささるるをのつて生涯を終ることをおぼへ繁栄豊腴の大都會  
 小住さる羊さる歳々梅柳煥色の春を樂し事實小天幸の人といつて  
 ○雪の正月  
 初編小いささる如く我國の雪ハ鷲毛をさる稀あり大くハ白砂を降るが  
 如く冬の雪ハささる凝凍こさる春小いささるごとく鉄石のごとく

驛中の正月積雪の圖

三言二多卷之一



雪



雪

地上  
皆  
雪

五言二多卷之二

五

文溪堂藏

文溪堂藏



塩を入るる堅あると石の如くゆゑ小兒互小塩を入るを禁むるありと  
 を以てする時ハ塩ハ物を堅むる物あり物を堅實小するゆゑ塩藏小を  
 ハ肉類も不腐朝夕嗽小塩の湯水を以てする齒をくちく齒の命を  
 長くせしむ玉粟ハ見戲あると塩の物を堅むる證とみる小なまり故小  
 あふ記せり又童のあそび小雪ノ堂とらむ夏あり初編小記せり

○羽子擿

我里俗を福をつくとらむを  
 うまるとりうちうまのなうま

江戸小正月せ一人の話小市中ゆく見上るるより松竹を飾るゆゑ  
 美しく粧ひる娘とら彩る羽子板を持つ並び立る羽子をつくまぬゆゑ  
 小も大江戸の春ありとぞ我里の羽子擿ハ邊鄙とらひるるがく艶  
 姿小あつと正月ハ奴婢ども少ハ許く遊をあるもむるゆゑ羽子を擿  
 んとくまぐ其処を見とく雪をうまう角力場のごとく小羽  
 子ハ渡路を一すくわと筒切小羽  
 こと小鶴雉の尾を三本さしりる

江戸の羽子小比る甚大ありことを擿小雪を掘木鋤を用ふ力小まを  
 て擿ゆゑ小空小あがる夏甚高しやう小大なる羽子のあふ小童ハまど  
 らむあつとさうる男女うちまどやとまきとさうるあつと小此戲をあると  
 あり一ツの羽子を並びとらてつとあふ小あやまらる取落しつものハ始  
 小定ありとあるハ雪をうちつけ又ハ頭より雪をあふあるその雪襟  
 懐小入りて冷小耐ざるを大勢が笑ふ窓よりことを視るも雪中の一興  
 あり京傳翁が骨董集小上編下学集を引く羽子板ハ文化十二年  
 より三百七十年をうりの前文安のころありゆゑのゆゑと見より  
 あつとあつとありし事ハ詳あると見ゆゆゑ又下学集ハ羽子板  
 小ユキイタと両丸あをつけしゆづとゆゑの子とら小羽子の夏ありとあり我  
 国小も江戸の如く小兒女のをねをつく所もあり

○雪吹小焼飯を賣

塚山嶺雪吹圖

雪詩二編卷之十一

文治堂藏



の風雪  
まづ



雪詩二編卷之十一

八  
文治堂藏



まさしく甚しく様を穿ぬる道邊く日も已小暮あんとて此時小い  
 うり焼飯を賣する農夫ハ肚減て勞と商人ハ焼飯小腸満足を  
 めり往農夫ハ屢後るゆゑ終ハ棄て独先の村小いりあるべの家小  
 入りく炉辺小身を温る酒を酌始り蘇生するおひをりけり  
 〇さてをきくわりのやうにと呼声遠く聞を家内の者きつつけ  
 けをきく雪中の常と雪吹倒とを扶けよと近隣の人をも  
 よび集め手毎小木鋤を持し木鋤を持ハ雪小埋りし雪吹たりの常  
 わりく大勢の一人の死骸を家の土間昇入しをらの商人も立寄  
 兄と六最前焼飯を賣する農夫ありしとてその芋徳商人或時余が  
 俳友の家小逗留の話小件の事を語り出り彼時我六百の錢を惜  
 焼飯を買せんハ雪吹の中小餓死せんころの農夫が如くあるべし今  
 日の命も錢六百のうちありとて笑ひしと俳友が語り

○雪中の戯場

五穀豊熟しと年貢も心易く捧げ諸民鼓腹の春小遇一時  
 氏神の祭あど小遭しを幸小地芝居を興行する夏あり役者ハ皆  
 其処の素人あどハ近村近駅より來るあり師匠ハ田舎芝居の  
 役者を備ふ始小寺あど群居く狂言をききあどこのちをきくの  
 役を定む此群居の議論紛々として一度あど果しと夏あり事定  
 りそのち寺小於て替古をとりむ技熟してのち初日をきき衣裳艶  
 のるゝ是を借を一ツの業とまるとのあり物不足なり此芝居  
 二三月の頃まると事あり此時ハ雪の消ぎる銀世界ありさきと  
 芝居を造る此役者等が家ハさうあり親類縁者朋友より人を  
 出りあどハ人を備ひ芝居小屋場の地所の雪を平らう小踏かき  
 舞臺花道樂屋棧敷のるゝを皆雪をあめてその形小つら



ありしごとく造ること下の圖を見て知るべし此雪少く造りし物天又人  
 工をたぎけて一夜の間凍く鉄石の如くふるもあつたやど大入りも  
 さぐさきの崩る氣づひあり孫生の頃ハ雪もや稀るまば春色の空  
 を見ると家毎小雪圍を取除くところありは如くより雪かこひの丸太あ  
 るハ雪垂るまば幅八九尺廣さ二間をりふつりする簾を借  
 めのりてきてての日覆とあるまば花もハ雪もて作りする上小板を  
 あらざる此板も一夜のうち氷つきまば釘付小あつたりも堅く暖  
 国小比まば論の外あり物を賣茶屋をも作りしづまの如く平一面の  
 雪のまば物を煮処ハ雪を窪り糠をちりり火を焼バ雪の解る事  
 妙あり○さて戯場の造作成就して春の雪ありつゞまば連日晴を  
 見ぞ興行の初日のびる時ハ役者ふありする家ハさく此まをを見ん  
 とく諸方小逗留の客多く毎日空をあらめて晴を待てば客のり  
 めりもあつて始倦果終ハ役者仲間いひあらせ川の氷を碎  
 て水を浴干垢離しく晴を祈るまをり

百樹曰余丁酉の夏北越小遊び塩沢小在一時近村小地芝  
 居ありと聞て京水と俱小至り小寺の門の傍小杭を建て横  
 小長き行燈あり是小題く曰當院屋根普請勸化の為本  
 堂小於晴天七日の間芝居興行せむものあり名題ハ假名  
 手本忠臣藏役人替名とあり役者の名多くハ假名あり  
 寺の門内ハ假店あり物を賣り人群をあらは芝居ハ假小  
 戸板を集り圍る入り口あり小守る者あり一人前何程と  
 價を取ると屋根普請の勸化あり本堂の上り段小舞臺を  
 作り掛左ハ花道あり左右の棧敷ハ竹林普薦張あり土間ハ  
 薦を布遊をあらふ旅の芝居大槩ハかくの如くと市川白猿が話

雪中演場を造る図



地上  
皆雪あり

雪國ニ松樹をトアして  
 長一丈以上ノモノヲ是者トス  
 天屢是ノ故ニ城后ノ園ニ  
 物々多ク降人子ノキト是

雪

雪國ニ松  
 桐亦一  
 画者不  
 知  
 系うけ

寺



雪中演場を造る圖



地上  
皆雪あり

雪国子校  
桐ふ  
画者不  
知く  
系うけ



寺

雪譜二編卷之止

十二

東齋

雪譜二編卷之止

東齋

小もきうぬ 棧敷のらかーこふ 欲然やうな毛氈をうけけらうふ 彩色  
 画の屏風をたてーふけのをきあり四五人の婦まゝ綿帽子を  
 邊鄙小古風を失さるゝ観人群をうて大入るゝ猿の如き童ども樹  
 小のわりてゝもあり小娘が荒を提る氷こよびと土間の中を賣る  
 荒のあつ木の子葉をまき雪の氷の塊をうると茶を賣つぎを氷  
 を賣るゝ甚めづじ氷のこと削氷の條ふらつーのさて口上りひ  
 出く寺へ寄進の物あひは役者へ贈物餅酒のふく一人の名を  
 奉品を呼ぶ披露ー此処忠臣藏七段目をまじりといひ幕開  
 ちかふ小折ーの岩井玉之丞とと田舎芝居の戯子あつー願う美  
 あり由良の助小折ーの余が旅中文雅を以識人あり年若あれば  
 かる戯をもるをあるべー常あつらうて今テの坂東彦三郎小似  
 たり技も又観不足り寺岡平右門小ありしハ余が客舎小きく宛頭

ありこども常小かそりて関三十郎小似て音声もまゝ天然と関三の  
 如く余京水と相顧て感へ京水たつたふ小イヨ尾張屋と誉けつ尾  
 張屋ハ関三の家号ある事通じつと尾張屋といひものいりも  
 あり一幕あつてとせー小守る者木戸をいささだ便所ハ寺の後小  
 あり空腹あつて弁當を買玉取次やさんとつ我のふあつて人も  
 又いささだむの小人散ハ演場の蕭然を厭ふあつてーいひくあ  
 出所あつんと尋へ小此寺の四方垣をめぐりて出へきの際より折  
 あり童が外より垣をやがりて入りさるその穴より兩人入りりて  
 こども又可笑一ツあつてありて

○家内の氷柱

旧冬より降積る雪家の棟より高く春ふありても家内薄暗さ  
 めも高窓を埋る雪を掘のけり明をさること前ふりてか如く此

屋上の雪ハ冬のうちに悉く掘つて度々木鋤こきをもちて屋  
 上を撫むる変あり我國の屋上もわくわく板葺あり屋根板ハ他国  
 小比ちひも厚く廣くひろ葺き字上小算木さんぎといふ物を作り添石まきを置おきて  
 鎮しづと風を防かぎの便たすとて是れもあふ雪をわりのつとといふもほくま  
 ことありとそその雪のうへ小早春の雪ふりつり凍こりて屋根の中  
 道をまじりて春も稍深やまるまは雪も日あつて解とける焼火やまびの所雪早  
 く解とける小いころかの屋根の損たりたる処木羽こたの下をころりあて  
 雪水漏ゆきづゆゑ夜中よな俄たち小畳たたをとりけ桶鉢かきのるゐあつてをまじ  
 て漏もをうらうらるゑを修治しゆぢとせる小雪こゆき全くまえざるゆゑ手をくま  
 変ありと漏もハ次第しだい小こわり座敷ざしきの内小いくらも大なる氷柱こしを  
 見みる時あり是暖国ぬるくにの人小足こあしせとておもしろ  
 百樹曰余越遊ひゃくじゆいづして大家だいにの造りやうを見みる小楹こていの太ふと江戶えどの

土藏どぞうのごとく天井てんじやう高く欄間らんま大ありと雪の時明あけをとる  
 とあり戸障子とじ骨太こつたとて手丈夫てぢゆうぶありゆゑあま閩鴨柄あまのうらひも廣く  
 厚あつくあつく大材おほいざいを用もちる事目ことめを駁おしせりこと皆雪ゆき小潰つぶざるの  
 用心こころありと江戶えどの町小い店下みせしたを越後えちご小雁木かりぎといふ雁木の  
 下廣くひろくひろく小荷駄こにがたをも率ひへきやとありことハ雪中ゆきなか小六こむの庇ひ  
 下を往來ゆきの為ためあり余越後よえちごより江戸えどへ飯いる時高田たかたの城下じやうげを通と  
 へらへ北越きたえちご第一だいいちの市會いちかいあり高工軒たかうきげんをあらへ百物ひゃくぶつ備そなへて  
 りり兩側りうがわ一里いちり余庇下よひしたつぎとつぎの中を往ゆこと甚い意快いんがいありき  
 文墨ぶんぼくの雅人みやびびとも多おほくときしが旅中りよちゆう年の凶あやまる小遣飯家こぢいめいを急いそぎ  
 ゆゑ刺さを入いれりハ今いま小遺憾こいげんとせ

○雪中歩行の用具

雪中歩行ゆきなかあひの具ぐ初編しよへん小其圖こそのづを出いししが製作せいさくを記しさどあつて



右の外男女の雪帽子雪下駄其餘種々雪中歩用の具ありども薄  
雪の国小用あり物ふ似たりハハ小省く



百樹曰余  
北越小遊びて  
牧之老人が家小  
在り時老人  
家僕小命じて雪を漕  
形状を見せしる京水傍小  
ありて此圖を写り穿物ハ  
の機。縫あり戲小穿てしるが  
一歩も進とあはるば家僕があめむ馬を御とるごとく

○ 轄

轄 字彙 禹王水を治り時載る物四ツあり水小舟陸小車泥小  
轄山小標 註書徑 志るは此轄といふもの唐土の上古よりありしぞう  
彼ハ泥行の用ありて雪中小用ありてハ製作異ありて轄の字美  
○ 莖。棧。秧馬 諸書小散見を或ハ。雪車。雪舟の字を用ふる俗  
用あり

そもく此轄といふ物雪国第一の用具人力を助事船と車小同く  
且小作事最易きハ圖を見ん知るべし堀川百首兼昌の哥小  
初深雪降ふけくまあはち山越の旅人轄小のるまへこの哥をもの  
くも我国小そりをつるもの古をみるべし前ふも志をくくつるごとく  
我国の雪冬々凍さるゆゑ冬小轄をつるハ雪小ちりりく撞おとさ  
らり轄ハ春の雪鉄石のごとく凍さる正三三月の間小用ふべきもの

其時小いりを里俗輜道ふあり〜と云  
俳諧の季寄小雪車を冬とせりハ詠事りさきとて雪中の物うらむ  
春の季小ハ似氣う〜古哥あも多ふ冬小よあり實ゆたがふとも  
冬と〜可あり

輜ハ作り易物ゆゑわう〜農商家毎小是を貯ふさきとて載るもの小  
より〜大小品もあきと〜作りあう皆同トやうあり名も又あや〜只  
大あるを里俗小修羅と云大石大木をのさるあり

山々の喬木も春二月のころハ雪小埋り〜か梢の雪ハ稍消て遠目あも  
見ゆ〜此時薪を伐小易けき〜農人等あ〜輜を拖て山小入る或ハ  
そりを〜藁小置もあり常小見上る高枝も埋り〜雪を天然の足  
場と〜心の休小伐と〜大く〜六把を一人ま〜とせりありさて下小三把  
を並〜中ハ二把上ハ一把と〜を繩あ〜強〜縛〜藁小臨〜蹉跌小

凍る雪の上あ〜数百丈の高も一瞬の間小あ〜と小いりを輜小  
のせ〜引〜或ハま〜山小九曲あ〜六件のご〜小傳〜薪の  
輜小乗り片足をあ〜せ〜是ゆ〜楫をとり船を走ら〜と〜  
難所を除〜数百丈の藁小〜も過〜其術学〜と〜  
自然小得〜処奇〜妙〜あり

輜を引〜薪を伐〜と〜いあ〜せ〜行〜と〜三三人の食を草ゆ〜編  
〜る袋小〜と〜輜小〜〜と〜あり山鳥〜と〜を〜と〜む〜ぐり  
き〜り袋をや〜り〜食を喰〜を樵夫〜と〜を〜と〜今日うせきの生業〜と  
こ〜め〜た〜り〜や焼飯小せん〜と〜打〜り見〜と〜一粒もの〜と〜鳥  
〜の〜樹上小あり〜啼人ハ〜鳥を睨〜詈り空肚をか〜と〜  
輜哥〜と〜輜をひ〜と〜事〜あり〜と〜その人の〜と〜き  
そりをひ〜と〜と〜と〜是を輜哥〜と〜と〜と〜樵哥あり





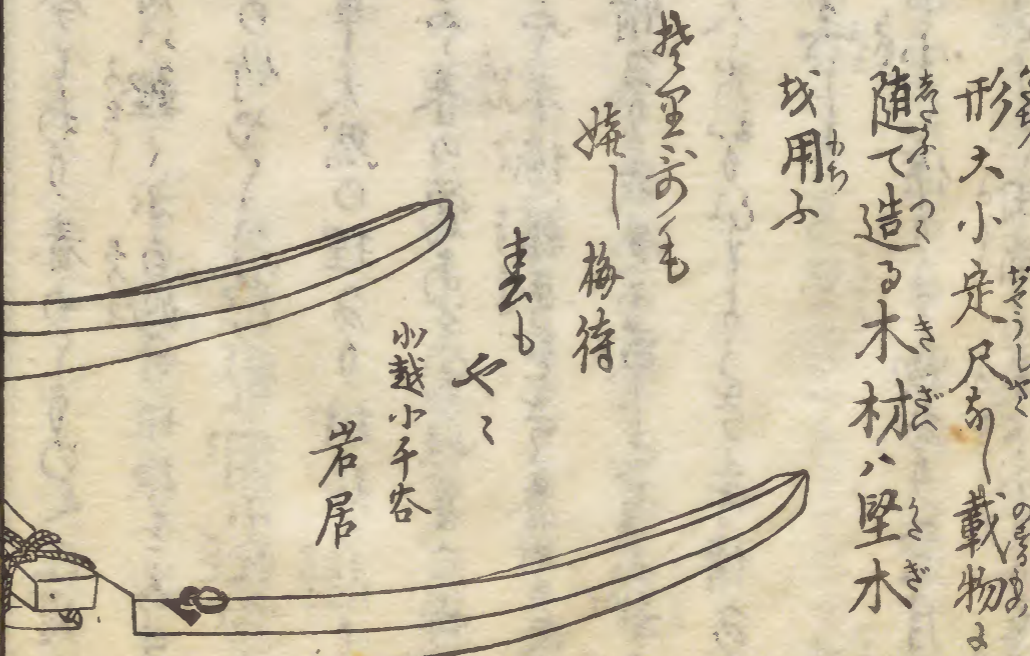
秋月産牧之草



兒童垂氷を  
鞘の七太持の

まがひ  
学をして  
時ハ表あり

鞘全図



形大小定尺あり  
載物に  
随て造る木材ハ堅木  
以用ふ

梅待  
まも

小越小千谷  
若居





春ふりては寒氣地中より氷結あぐるその力礎をあびて椽を  
反しあひの踏石をも持あぐる冬ふりては寒むるともかゝる事あり  
さまじくも雪も春の凍く轄をもつらふも屋根の雪を掘のけつて  
上ゲあぐを里言ふ掘揚とらひ前より往來の路も掘あびありと山  
をのめぬ春雪のこりふりては雪の山小箱棧のごとく階を  
作りて往來のたよりとせあうの所らつてこもあるゆゑ小下踏の齒小  
釘をあらう打て蹉跌ざる為とを唐土ゆては是を標とて山小のむら小  
まづぎる履とを標和訓カシキとあり

○シガ

冬春ふりては雪の氣物ふらとて霜のむきよるやうふる是を里言ふ  
シガとの小戸障子の隙より雪の氣入りて坐敷小シガをらす時あり  
此シガ朝暾の温氣をうらる處の解とあつる春の頃野山の樹木の下

枝ハ雪ふるづもとても梢ハ雪の消る小シガのつきよるハ玉めて作り  
しる枝のやうゆゑ見事あるものあり川辺とをさく者ハ髪うけの毛  
ふもシガのつく事あり此シガ我ガ塩沢しほふらまきありちり郡ちりの中  
小出嶋こいであつらふ多一大河小近きゆ水氣すゑの霜とあるゆゑあわん

○初夏の雪

我国の雪里地ハ三月のころふりては次第しだいに消朝あさハ凍こと鉄石の  
如くあると日中ひちゆうハ上より下よりまきある月末しげふりては目めも  
るやど小昨日きのう今日けふと雪の丈け低くありゆ雪も降ふまると雪圃ゆきとら  
うと取のけ家のやう庭にわあとの雪をも掘かまつる小雪凍りて堅かたまゆ  
雪を大鋸おほのこぎりふら大鋸おほのこぎり里言ふひきりてはまつるその四角しかくある雪を脊負せおひ  
あひハ擔持おほひもち小きるゆと暖国ぬるくにの雪とハ大小異り雪小枝ゆきこえを折おと下と杉  
丸太まるたいをそへてをりうづげあまする庭樹にわぎあとも解とけハさそふ梅うめ

雪の中ふ蒼をふくく春待るありと春の末あり此時ふりて去  
 年十月以來暗く〜坐敷もや〜明くあり〜盲人の眼のひくま  
 する心地せ〜〜離は〜〜桃の節供の名の〜花は〜  
 あり四月ふ〜田圃の雪も斑ふ〜去年秋の彼岸ふ時〜野  
 菜の雪の下ふ崩れ梅の盛を〜桃櫻ハ夏を春とと雪ふ  
 埋り〜泉水を掘い〜去年初雪より以來二百日あまり黒闇の水  
 のあふありし金魚鯉あんどう〜〜浮泳も言〜  
 とら〜五月ふり〜人の手をつけ〜日蔭の雪ハ依然と〜山を  
 あり況や山林幽谷の雪ハ三伏の暑中ふも消ぎる所あり

○削氷

百樹曰余丁酉の年の晩夏豚兒京水を従〜北越ふ遊〜時三國  
 嶺を踰〜六月十五日あり〜ふ谷の底ふ嘗をき〜

足〜ふ雪を聞〜我も〜谷〜の山〜  
 拙作〜も實境あり〜記も此嶺〜四里山徑隆堀〜  
 数武も平坦の路を踐む浅貝〜入取ふ宿り猶〜二居嶺〜  
 三候〜山取ふ宿〜芝原嶺を下り湯沢ふ抵んとする途〜  
 遙小一楹の茶店を見〜底の〜小床あり〜浅き箱やうのものふ  
 白く方ある物を置〜遠目〜石花菜を賣〜ん口〜上〜  
 ぎ〜山を〜暑〜汗〜小足も  
 つ〜茶店ある〜京水〜小〜腰を  
 うけかの白き物を見〜雪の氷ありけり六  
 月ふ氷を〜事江戸の目〜最珍〜け〜熟視バ  
 深さ五寸計の箱小氷を〜の中ふ小〜踏石〜雪の氷を  
 お〜賣茶翁〜山蔭の谷ふあり〜たま〜



六月 賣雪圖



百譜二編卷之上

九四

文溪堂藏

百譜二編卷之上

文溪堂藏

あつてつゞのさく氷室と厚氷を山蔭などの極陰の地中小藏  
置屋を作りつゞ守らる古哥ゆもよめる氷室守是あり其  
氷室ハ水の氷残をさめちやう小諸書の注記も見え一ツ水の  
氷もろく不潔なり不潔をりつゞ貢献めらるをさうす且水の氷ハ  
地中小有りて消易めあり是他も一水ハ極陰の物ありゆゑ  
陽小感ト易めあり我越後小削氷を視て思ふかの谷間小  
在とらひハ天然の氷室ありむづの氷室とらハ雪の氷りもろ  
あつて極陰の地小敷を作り屋を造り掛別小清淨の地小垣を  
めづつて人小踏せむ鳥獸ゆも織さる守而雪を待雪ふもバ  
此地の雪をかぬ敷小撞と埋り人は是を守り六月朔日是を用最  
清淨ある所を貢献せしめん致是已ハ臆断を以て理小就て古  
の氷室を解するあり

○氷室の古哥枚挙つゞむかの削氷を賞味一玉ひつる定家小  
拾遺愚州 夏あつて秋風なるぬ氷室山とらむ冬をこのことかハ  
又源の仲正ハ 千載集 下つゞの氷室の山のを櫻を消残りハ雪小見とらる  
雪つゞを見つゞの哥氷室山のおを櫻を消残りハ雪小見とらる  
一首の意氷室ハ雪の氷あつてむかの今加州候毎年六月朔日  
雪を献ト玉も雪の氷ありことゆゑ古の氷室ハ雪の氷あつてを  
かゆのつゞのさくかの茶店ちや雪の氷をめづつてむかのハ小その  
次日より塩沢の牧之老人ハ家不在ハ日毎小氷ことよびて賣来る  
山家の老婆あつて掌やとらるを三錢ふらるをさうらハ二三度賞味  
せつゞのちやハ氷もむかむかむかむかむかむかむかむかむか  
得易ハめづつてつゞの人情の恆あり塩沢小居と六月の氷の  
めづつてつゞのちやハ吉野の人ハつゞの花もむかむかむかむか

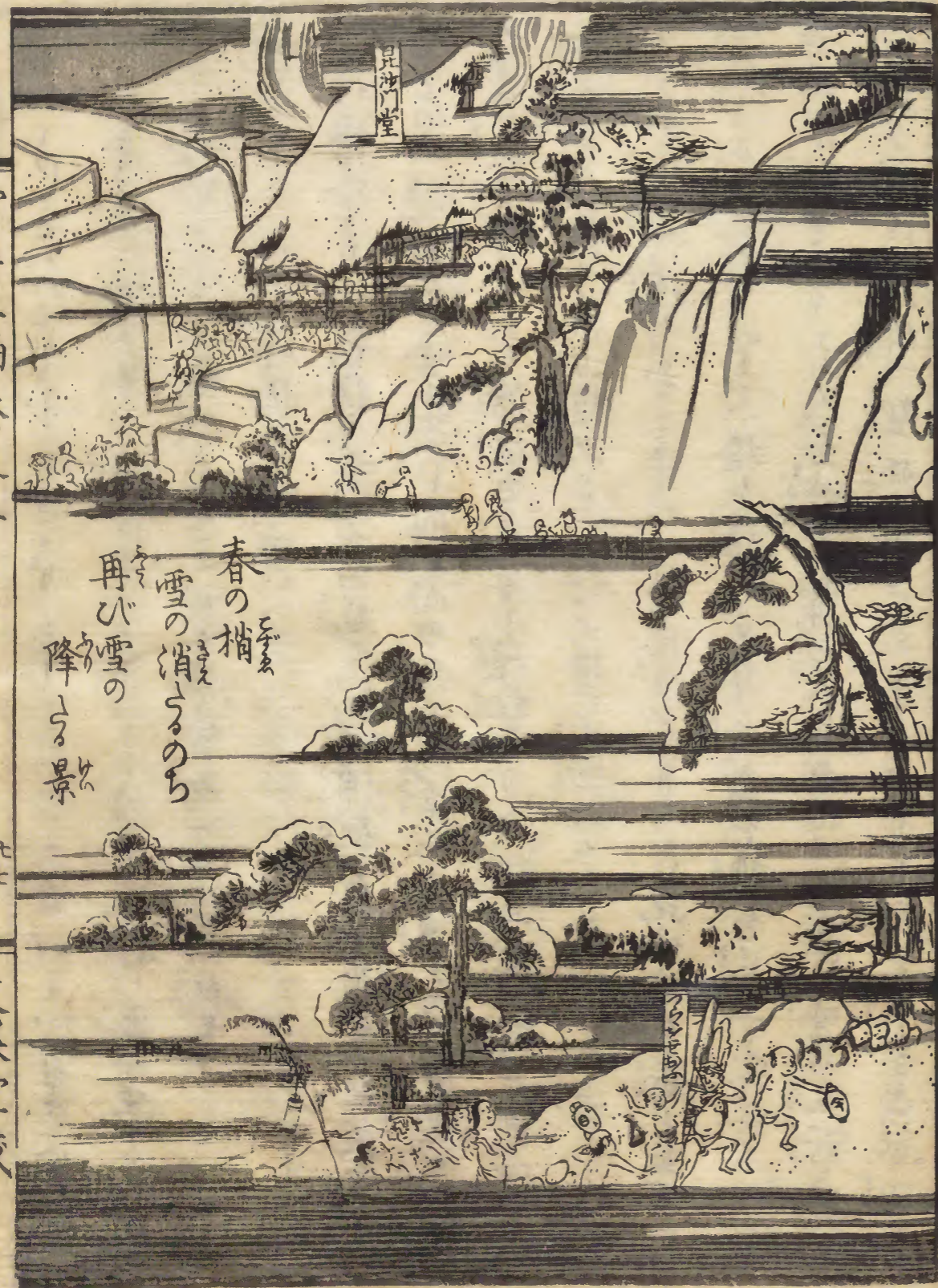


鳥の人ハ松鳥の月と云ふも、  
あつ我子の顔と藏置黄金の光あり

○雪の多少

越後国南ハ上州ハ隣<sup>とま</sup>魚沼郡あり東ハ奥州羽州ハ隣<sup>とま</sup>蒲原郡岩船  
郡あり国境ハいづれも連山波濤をなす多雪多<sup>とま</sup>東北ハ鼠<sup>ねずみ</sup>南<sup>みなみ</sup>岩船  
出羽<sup>でひ</sup>西<sup>にし</sup>市振<sup>いちぶり</sup>越中<sup>えちゅう</sup>の境<sup>さかい</sup>ハ至<sup>いた</sup>の道八十里ハ間都<sup>まんと</sup>北<sup>きた</sup>の海濱<sup>うみづら</sup>あり海気小<sup>うま</sup>  
りハ雪一丈ハいづれも<sup>とま</sup>年<sup>とし</sup>少<sup>すく</sup>あり又消<sup>き</sup>も早<sup>はや</sup>一頭城郡の高田ハ海を去<sup>さ</sup>事  
遠<sup>とほ</sup>く<sup>とほ</sup>ども雪深<sup>ふか</sup>一文化の<sup>とま</sup>り大<sup>おほ</sup>雪の時高田の市中<sup>まち</sup>ハ雪<sup>ゆき</sup>  
埋<sup>う</sup>り<sup>う</sup>闇夜<sup>やみ</sup>のごとく<sup>とま</sup>昼夜<sup>ちゆうや</sup>を<sup>とま</sup>事<sup>こと</sup>十余日市中<sup>まち</sup>燈<sup>と</sup>の油<sup>あぶら</sup>ハ諸人難<sup>たが</sup>  
免<sup>ま</sup>せ<sup>ま</sup>小御領<sup>こごりやう</sup>主<sup>ぬし</sup>より家毎<sup>いえごと</sup>小油<sup>こあぶら</sup>を賜<sup>たま</sup>ひ<sup>たま</sup>事<sup>こと</sup>あり此<sup>こゝ</sup>時<sup>とき</sup>我<sup>われ</sup>塩<sup>しほ</sup>沢<sup>たく</sup>ハ大  
雪<sup>ゆき</sup>ハ<sup>ゆき</sup>夜<sup>よ</sup>昼<sup>ひる</sup>を<sup>とま</sup>家<sup>いえ</sup>雪<sup>ゆき</sup>ハ<sup>ゆき</sup>日<sup>ひ</sup>光<sup>ひかり</sup>を<sup>とま</sup>事<sup>こと</sup>十四日<sup>じゅうしつ</sup>連<sup>つ</sup>日<sup>つひ</sup>  
家<sup>いえ</sup>ハ<sup>ゆき</sup>人<sup>ひと</sup>氣<sup>き</sup>鬱<sup>ふさ</sup>悶<sup>もん</sup>ハ<sup>ゆき</sup>病<sup>びょう</sup>を<sup>とま</sup>事<sup>こと</sup>ありけり

百樹曰余牧之老人ハ此書の稿本<sup>こうぼん</sup>ハ就<sup>す</sup>て増修<sup>ぞうしゆ</sup>の説<sup>せつ</sup>を添<sup>そ</sup>上<sup>じやう</sup>梓<sup>し</sup>の  
為<sup>ため</sup>小傭書<sup>せうしよ</sup>ハ授<sup>たま</sup>一本<sup>いっぽん</sup>を作<sup>つく</sup>るを<sup>とま</sup>事<sup>こと</sup>ハ老人<sup>らうじん</sup>ハ寄<sup>よ</sup>る書<sup>しよ</sup>中<sup>ちゆう</sup>ハ小  
當<sup>たう</sup>年<sup>ねん</sup>ハ雪<sup>ゆき</sup>遅<sup>おそ</sup>く冬<sup>ふゆ</sup>至<sup>いた</sup>小成<sup>せうじやう</sup>也<sup>なり</sup>馬<sup>ま</sup>中<sup>ちゆう</sup>の雪<sup>ゆき</sup>一尺<sup>いちせき</sup>ハ<sup>ゆき</sup>此<sup>こゝ</sup>日<sup>ひ</sup>次<sup>つぎ</sup>ハ  
今<sup>いま</sup>年<sup>ねん</sup>ハ小<sup>こ</sup>雪<sup>ゆき</sup>ありと諸人<sup>しよじん</sup>一<sup>いつ</sup>統<sup>とう</sup>悦<sup>えつ</sup>び居<sup>い</sup>所<sup>しよ</sup>ハ廿四<sup>じゅうし</sup>日<sup>にち</sup>黄<sup>わう</sup>昏<sup>こん</sup>より  
降<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>廿五<sup>じゅうご</sup>六<sup>ろく</sup>七<sup>しち</sup>八<sup>はち</sup>九<sup>きゅう</sup>日<sup>にち</sup>まで五日<sup>ごにち</sup>の間<sup>のま</sup>昼<sup>ちゆう</sup>夜<sup>や</sup>ハ<sup>ゆき</sup>事<sup>こと</sup>ハ一丈  
四五尺<sup>しよごふせき</sup>あり<sup>ゆき</sup>申<sup>まを</sup>い<sup>い</sup>毎<sup>まい</sup>年<sup>ねん</sup>の事<sup>こと</sup>ハ<sup>ゆき</sup>不<sup>ふ</sup>意<sup>い</sup>の大<sup>おほ</sup>雪<sup>ゆき</sup>ハ<sup>ゆき</sup>廿七<sup>じゅうしち</sup>日  
より廿九<sup>じゅうきゅう</sup>日<sup>にち</sup>まで<sup>ゆき</sup>馬<sup>ま</sup>中<sup>ちゆう</sup>家<sup>いえ</sup>毎<sup>まい</sup>の雪<sup>ゆき</sup>掘<sup>ほり</sup>少<sup>すく</sup>混<sup>ま</sup>雜<sup>ざつ</sup>ハ<sup>ゆき</sup>簷<sup>えん</sup>外<sup>がい</sup>急<sup>きゆう</sup>玉<sup>ぎよく</sup>  
山<sup>さん</sup>を築<sup>き</sup>戸<sup>こ</sup>外<sup>がい</sup>ハ<sup>ゆき</sup>惘<sup>む</sup>り<sup>む</sup>申<sup>まを</sup>い<sup>い</sup>今日<sup>けふ</sup>も又<sup>また</sup>大<sup>おほ</sup>雪<sup>ゆき</sup>吹<sup>ふ</sup>小<sup>こ</sup>相<sup>さう</sup>成<sup>じやう</sup>家<sup>いえ</sup>内<sup>ない</sup>  
暗<sup>くら</sup>く蠟<sup>ろう</sup>燭<sup>そく</sup>ハ<sup>ゆき</sup>此<sup>こゝ</sup>状<sup>じやう</sup>を<sup>とま</sup>事<sup>こと</sup>ハ<sup>ゆき</sup>何<sup>なに</sup>程<sup>ほど</sup>可<sup>か</sup>降<sup>ふ</sup>哉<sup>や</sup>難<sup>たが</sup>計<sup>けい</sup>一<sup>いつ</sup>同<sup>どう</sup>心<sup>しん</sup>  
痛<sup>いた</sup>い<sup>いた</sup>居<sup>い</sup>申<sup>まを</sup>い<sup>い</sup>下<sup>した</sup>界<sup>がい</sup>是<sup>こゝ</sup>當<sup>たう</sup>年<sup>ねん</sup>天<sup>てん</sup>保<sup>ぽ</sup>十<sup>じゅう</sup>一<sup>いつ</sup>月<sup>げつ</sup>廿九<sup>じゅうきゅう</sup>日<sup>にち</sup>出<sup>で</sup>の尺<sup>せき</sup>輪<sup>りん</sup>あり  
此文<sup>こゝのぶん</sup>を<sup>とま</sup>事<sup>こと</sup>ハ越<sup>えち</sup>後<sup>ご</sup>の雪<sup>ゆき</sup>を<sup>とま</sup>事<sup>こと</sup>ハ<sup>ゆき</sup>余<sup>われ</sup>越<sup>えち</sup>後<sup>ご</sup>の夏<sup>なつ</sup>小<sup>こ</sup>遇<sup>ぐ</sup>ハ<sup>ゆき</sup>小<sup>こ</sup>五  
穀<sup>こく</sup>蔬<sup>そ</sup>果<sup>くわ</sup>の生<sup>せい</sup>育<sup>いく</sup>少<sup>すく</sup>ハ<sup>ゆき</sup>雪<sup>ゆき</sup>を<sup>とま</sup>事<sup>こと</sup>ハ<sup>ゆき</sup>色<sup>いろ</sup>ハ<sup>ゆき</sup>山<sup>さん</sup>景<sup>けい</sup>野<sup>や</sup>色<sup>いろ</sup>ハ<sup>ゆき</sup>雪<sup>ゆき</sup>ハ

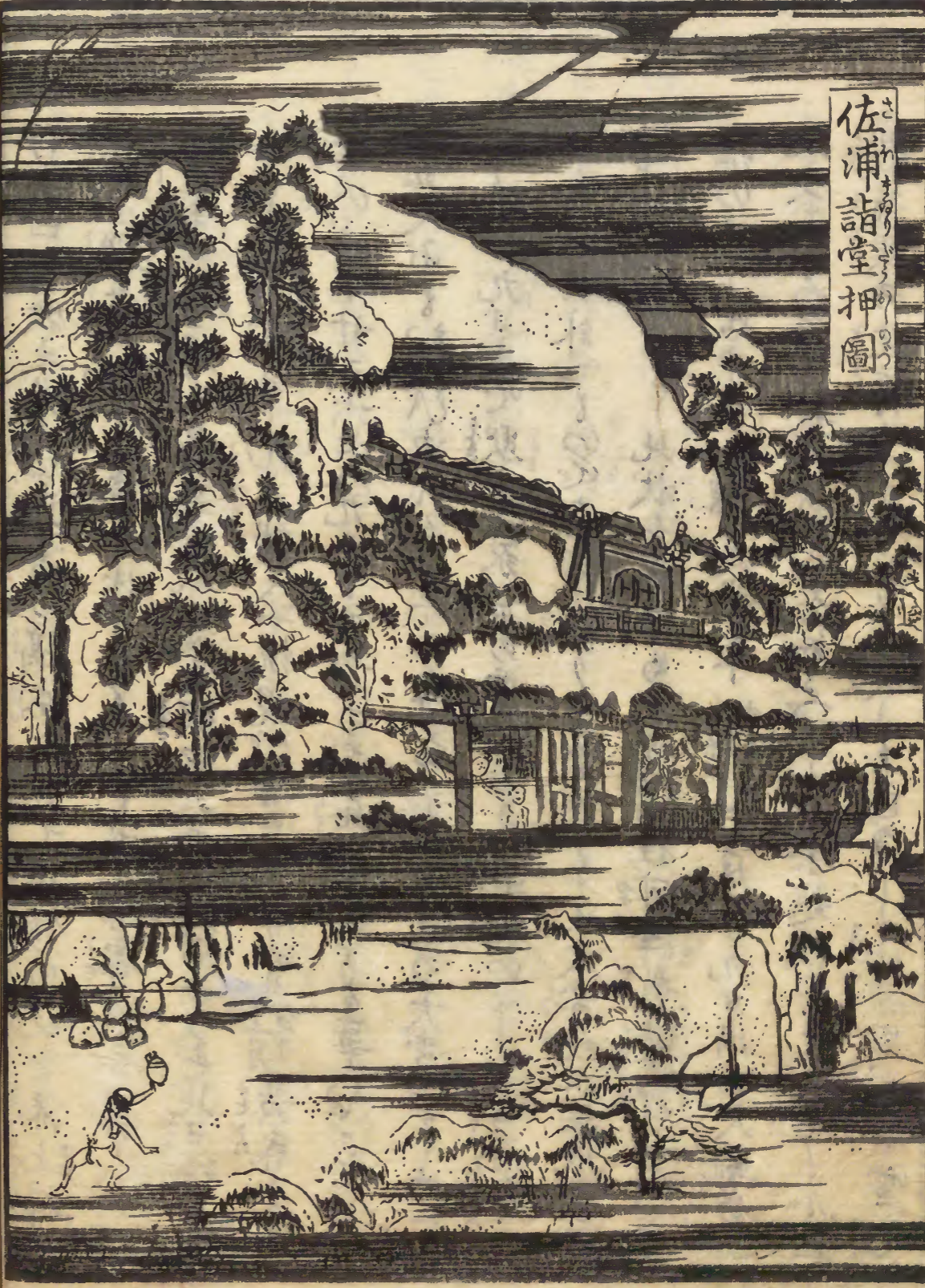


春の描  
雪の消るのち  
再び雪の  
降る景

雪譜二編卷之上

九七

文英堂藏



佐浦詣堂押圖

雪譜二編卷之上

文英堂藏

りしとわがりしと雪の浅き他国小同ト五雜組小部百草雪を畏  
むしと霜を畏る蓋雪ハ雲小生ト陽位也霜ハ露小生ト陰  
位也とつり越後の夏を視て謝肇淛が此説小伏せり

○浦佐の堂押

我住塩沢より下越後の方二宿越六日町浦佐との宿ありとふ普光  
寺との真言あり寺中小七間四面の毘沙門堂あり傳ふ此堂大同二  
年の造営ありとを修復の度毎小棟札あり今猶歴然と存る毘沙門の  
御丈三尺五六寸往古椿沢といふ村小椿の大樹ありとを伐て尊像を作り  
しとを作名傳らざるときは像材椿あるをのりて此地椿を薪とまき  
るのほど祟ありゆゑ小椿を植て又尊冥鳥を捕を忌玉ふゆゑ小諸鳥  
寺内小群をありと人を怖む此地の人鳥を捕うあひハ喰ふ立所小神  
罰ありたとい遠郷一聳娘小ゆきと年を歴ても鳥を喰を必凶應

あり冥驗の照くる事此を以て知るべし遠郷近邑信仰の  
人多ししりしり此毘沙門堂小於て毎年正月三日の夜小限り  
堂押との事あり敢祭式の礼格とをふあつ種とむりより有末  
する神事あり正月三日ハもとより雪道あるも十里廿里より来りて  
此浦佐一宿し此堂押小過人もあはば近村ハいふとさるあり

○さて押小来りし男女まづ普光寺小入りて衣服を脱了身小持たる物も  
とてり小置棄婦人の浴衣小細帯まきとあはたらもあり男ハ皆裸あり  
燈火を點むるところの七間四面の堂小ゆゑ裸の男女推入りて錐をた  
つこの地より余も若かりしころ一度此堂押小あひか上あげて手  
を下さる事もあつたやと小逼り立けり押との誰ともあつサン  
ヨウくと大音小呼りて声の下小堂内小充滿する老若男女ヲサイ  
コウサイとよをりて北より南とつくと押又よをりて西より東と

かゝりしと此一むく男女俱小元結おのづから髪をきき受  
 甚奇あり七間四面の堂の内小裸ある人ともいひあげらる手もちろを  
 事ありぬやどるる人ひの多きをうりあふべし此諸人の氣息正月三日の  
 寒氣ゆゑ烟のごとく霧のごとく照せる神燈もことごとく為小暗く人の  
 氣息屋根うら小露とあり雨のごとく小降人氣破風よりりもて雲  
 の立のやが如く婦人稀小兒を背中小むきびつげく押し有るも  
 かの小兒啼おとあれも常とさるの不思議あり況此堂押小いさうも  
 怪瑕をうけける者むりり一人もみ婦人のあふ湯具をうり  
 ありもあまご闇処小噪雜しく一人もさうりかめさ事をせずさ  
 かの毘沙門天の神罰を怖るゆゑあり裸あり新以人氣少く堂内  
 の熱さること燃がごとくありあふ願望小よりて一里二里の所より正  
 月三日の雪中寒氣肌を射がごときをも厭む柱のごとき氷柱を裸身小

脊負て堂押小さるるもあり二むり三むり小いさうびつらある人も  
 熱と暑中のごときゆゑ堂のやう小ある大なる石の盥盤小入りて水を  
 浴び又押小入るもあり一ト押しく息をまむ七押七踊あて止を定す  
 踊といふも桶の中小半を洗ふがごとくゆゑ小入る満身小汗をあげ  
 第七をとり目小いさう普光寺の山長耕夫の長をいふ手小筋を持人の手輦小乘  
 て人のあふか入り大音小い毘沙門さぬの御前小黒雲が降とモウ  
 兼人 **あんどとさうさうのモウ** **山男** **米** **あうとさうさうのモウ** **とさらををり**  
 あふ此きら内摺バ凶作ありと外へとをりあふ又志願の者兼て  
 普光寺達しき小桶小神酒を入と盃を添て献む山男挑燈をりたせ  
 人をちりさう者サ人をうりささふとさう堂小入る此盃手小入る幸  
 ありさう人の傳をりさ取んと神酒ハ神小供をり扶り人小  
 散一盃八人の中擲ることを得る人ハ宮を造り祭其家あふと

おもむきなる幸福あり此てらんをも争ひ奪ふるも破るその骨一  
 本よりとも田の水はけりおひげこの水のかる田ハ熟實虫のつく事あり  
 神冥のあつらる事ある福入の知る所あり神事をたす人々誰散  
 一々普光寺小入り初葉置る衣類懐中物を視る小鼻糸一枚も失  
 る事あり掠奪即座小神罰あるあり。さて堂内入散り後々の  
 山長堂内小葎幹をちりちりて莫例あり翌朝山長神酒供物を備ふ後  
 ちぬ小進捧ぐ正面小をむむを神の忌ぬふと昨夜ちりちりて葎幹す折  
 小折あり是入散りてのち諸神と小集りて踊玉ふぬをを踏をり  
 玉ありとのひつてふ神事をべぐ見戯小似ること多しちりども凡慮  
 を以て量識べぐと此堂押小類せし事他國ありて姑記て類  
 を示す

北越雪譜二編卷之一終

